プラネタリウム解説員としての１年を終えて

事業企画グループ 天文チーム　長嶋 理子・島田 真帆

概要

私たちは、2024 年度より新規採用職員として、天文チームに配属された。当館では、大型映像と生解説の２形式で番組を実施している。生解説では解説員の個性を生かした投映が行われ、新人とはいえ、観覧するお客様に楽しんでいただける解説をしなくてはならない。新人職員がプラネタリウム解説員としてデビューするまで、どのように基礎知識を習得し、実践的な研修を積んできたのか、職員の「所感」という形で報告する。

1. はじめに

当館のプラネタリウムは、全天周デジタル映像を用いた「大型映像番組」と、解説員がその場で話す「生解説番組」の２形式で、日々の投影を行っている。

生解説番組には、子ども向けの「キッズプラネタリウム」、今夜の星空と時期に応じたテーマ解説の二部構成で行う「一般投影」（表１参照）、教育団体向けの投影などがあり、解説員はすべての形式に対応する必要がある。

当館の生解説には台本がなく、解説員の個性を活かした内容づくりが特徴である。それぞれの解説員が自分のスタイルで投影を行っている。また、生解説の番組はすべて館内で制作されており、番組制作も解説員の重要な業務のひとつである。

2024 年度に入社した私たちは、基礎研修を経て、天文知識や投影技術を身につけながら、段階的に実践的な研修へと進んでいった。

本稿では、その研修の流れや各自のデビューまでの取り組み、そして現在に至るまでの所感をまとめる。

投影プログラム一覧（表 1）

番組タイトル	開催時期
宇宙へＧＯ！ 夢の宇宙旅行	2024 年 7 月 9 日～ 9 月 16 日
月がきれいな夜に 話したい３つのこと	9 月 18 日～ 11 月 29 日
星降るクリスマス	11 月 30 日～ 12 月 25 日
まわる星とかわる季節	12 月 26 日～ 2025 年 4 月 13 日

2. デビュー前の研修の流れ

新たに解説員として加わった私たちは、プラネタリウムを担当する天文チームでの研修の前に、まず「全体研修」を受けることからスタートした。全体研修では館内の各部署を回り、チケット発券や展示室業務などを経験したことにより、館全体の流れを理解し、多角的な来館者視点を養った。

その後は天文チームでの研修に移行し、星座や天体の基礎知識、映像機材の扱い、入退場やお客様対応など、専門的かつ実践的な研修を行うとともに投影業務の練習も開始した。

投影業務は主に大型映像と生解説番組の２種類に分類される。生解説番組には複数の種類があり、比較的短時間で構成されている「キッズプログラム」から順に、「一般投影」や教育団体向けの投影へと段階的に取り組んだ。安全管理や注意事項をのぞき、当館の投影業務にはマニュアルがなく、個人に任されている。投影練習の方法や流れについても決まった型は一切なく、進め方はある程度我々に任されていた。そのため先輩に相談しつつ、練習はそれぞれのスタイルにて行った。各自のデビュー前の取り組みについては次章にて述べる。

3. 所感１（解説デビューにむけて）

・長嶋

まず、大型映像の投影に向けての練習が始まった。大型映像の業務には、上映前後のアナウンスおよび上映機器の操作が含まれており、まずは定型のアナウンス文を覚えることから着手した。加えて、マイクを通した話し方や発声方法、機器を操作しながらのアナウンスの練習など、先輩解説員の指導を受けながら習得を進めた。こうした準備を経て、5 月 14 日に大型映像の投影業務でデビューした。

大型映像のデビュー後、まもなく生解説番組の練習が始まった。最初は番組を特定せず、約30分間の星空解説に取り組んだ。練習方法は個人に委ねられており、私は話す内容を一言一句すべて書き出し、自分専用の台本を作るスタイルで準備を進めた。また、先輩の投影を操作卓（コンソール）の後方で見学し、投影中の所作や言葉の運び方を学ぶことも心がけた。

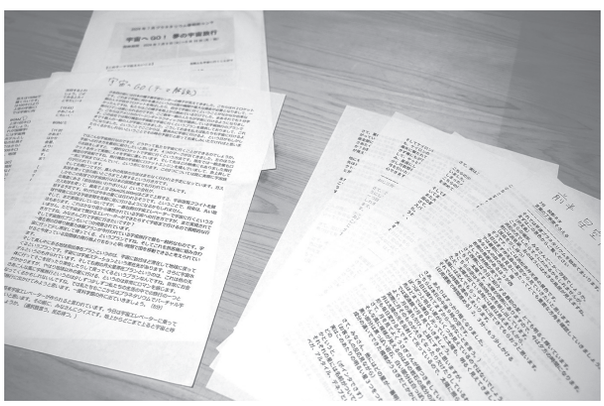

図1：自分専用の台本

練習を開始して約2週間後の6月上旬には、一度先輩に内容を確認していただき、話し方や発声方法、ポインターの使い方などについて具体的なアドバイスをいただいた。

その後も練習を重ね、7月初旬にはキッズプラネタリウムでの解説デビューが決定した。以降は、キッズ向けにわかりやすく柔らかい表現を意識し、時間配分にも注意を払いつつ練習を続けた。同時に、一般投影で必要となるテーマ解説の準備も進めた。映像とのタイミングを合わせて話す点に特に苦労した。また、番組の雰囲気を左右するBGMの選定にも時間をかけ、自分の話し方と調和する曲を選ぶよう工夫した。

こうした準備を経て、7月14日にキッズプラネタリウムでのデビューを迎えた。会場はほぼ満席で、緊張しながらも無事に投影を終えることができた。投影後には先輩からのフィードバックを受け、今後の改善点を確認しながら一般投影への準備を進めた。

7月22日には一般投影でのデビューを果たした。夏季休暇期間に入るタイミングだったこともあり、日々の投影回数も多くなった。そのことにより実践の経験を重ねることができた。

続いて9月10日には、団体向け投影のデビューもした。団体投影では、貸し切りのケースや子ども中心での利用が多いため、より親しみやすくフランクな話し方を意識した。また、開始時間や投影時間が団体の都合で変動する場合もあるため、同じ話題でも長短2パターンで対応できるよう、自身の台本の引き出しを増やす工夫も行った。

このように、各形式でのデビューに至るまでには、地道な準備と練習を積み重ね、先輩方からの助言を受けながら、少しずつ自信を持って投影に臨めるようになっていった。

島田

5月に入り大型映像番組の投影練習が始まった。先輩解説員の指導を受けながら、機器の操作を覚え、上映前後のアナウンスの練習をした。アナウンスは、観覧中の注意事項に加え、大型映像番組とプラネタリウムの違いや、当館のプラネタリウムの特長、どんな風に星を映し出すのか、などの説明も含む。この説明は、時と場合によって使い分けるのだが、いくつかのパターンとして練習を進めた。私自身、アナウンス文を一言一句セリフのように覚えることが苦手だったので、自分の言葉で話せるようキーワードを抽出し、自分なりに落とし込んでいく作業をした。先輩にアドバイスいただき、最初からマイクを使って場内の階段を上がる練習をした。反響しないようゆっくりと話すこと、転ばないように足元に気を付けること、息が上がらないよう深く呼吸をすること、お腹から声を出すことを心掛けた。始めはメモを見ながら、やがてメモを見なくても話せるようになり、身振り手振りもつけるようアドバイスをいただいた。

こうした準備を経て、5月23日に大型映像の投影デビューができた。当日はとても緊張したが、観覧者の方々の顔が見えて少し落ち着いた。大型映像番組についての解説では、練習ではぎこちなかった身振り手振りもうまくいき、プロジェクターの説明、ドームの大きさなどをお伝えできた。

何度も投影を繰り返すうちに、観覧者の方々の表情やタイミングを見ながら前説ができるようになってきた。

6月に入り、生解説番組の練習が始まった。約30分間の日没から夜明けまでの星空解説に取り組んだ。全体の流れを考え案内する星座について伝えたいことを洗い出すことから始めた。案内したい星座とその星座に関連するキーワードを書き出した。また、先輩方の投影をコンソール後方で見学させていただき、投影操作を学んだ。先輩方に投影中大切にしていることや気を付けていることなどをお聞きして、自分の投影で気をつけるポイントとして引き出しを増やした。

練習を開始して約３週間後の６月中旬頃から、先輩方に投影練習を見ていただき、ポインターの使い方、話し方や話すスピード、投影内容などについて具体的にご指導いただいた。また、同期の長嶋にも見てもらい、互いに相談し合いながら練習を進めた。
7月17日には、生解説プラネタリウムの他館見学として、コスモプラネタリウム渋谷へ伺い、投影の様子や言葉遣いを学ばせていただいた。コスモプラネタリウム渋谷の解説員である永田美絵氏には投影中に大切にしていることや発声練習などたくさんのことを教えていただいた。

その後、生解説デビューはまずキッズプラネタリウムからと決定した。子ども向けだが幼稚になりすぎないよう、わかりやすく伝えられるよう意識した。25分間という限られた時間なので、案内する星座を絞って練習した。BGMは、先輩にお勧めいただいた曲を流して練習を進めた。練習するにつれ、大きなドームの暗闇に一人で話しかけることが不安に繋がってしまうことも多々あった。そのような時は幼少期のプラネタリウムでの思い出で自分を奮い立たせた。プラネタリウムは星が綺麗に観える場所という感動が、星を好きな気持ちに繋がっている。その感動を一人でも多くの子どもたちに届けられるよう願って練習を繰り返した。
キッズプラネタリウムの準備と並行して、一般投影のテーマ解説の準備も進め練習をした。宇宙旅行のわくわく感と夏休みの楽しい様子を想像しながら、映像のイメージに合う曲を自分なりに選定した。投影するシーンのキャプチャーを、印刷してノートに貼り付け、話す内容やキーワードをまとめた。コマンド再生ボタンを押すタイミングや映像の動きに合わせての解説が難しく、どのタイミングでどのような速度とテンションで伝えるかなど苦労した。
こうした準備や練習を経て、8月1日にキッズプラネタリウムでのデビューを無事に終えることができた。当日の様子は今でも覚えている。問いかけの場面で子どもたちが大きな声で応えてくれ、満天の星空に感嘆してくれる声や呼吸が聴こえてきて、緊張が和らぎとても楽しみながら投影ができた。練習では一人で暗闇に一方的に話しかけていたが、観覧者の方々が居ると双方向のコミュニケーションが取れ、存在感や安心感などがとても心強かった。
その後、毎回投影後に先輩からフィードバックを受け、次に向けての準備と練習を繰り返しながら一般投影への準備を進めた。キッズプラネタリウム投影で観覧者が居てくれる安心感を覚えたので、一般投影ではその想像がよりリアルにできるようになり、練習がしやすくなった。
8月24日には一般投影でのデビューができた。当日は、夏季休暇期間だったこともあり、観覧者の方々のテンションも高く、一緒に楽しみながら投影できた。夏季休暇期間が終わり9月に入ると、観覧者が子どもよりも大人が多くなったので、落ち着いた口調で話すなど雰囲気作りも心掛けていった。
9月11日には、団体向けの投影「スタンダード投影」にて、初めて一つの団体に向けた投影を行った。100名近くの子どもたちが問いかけに対して応えてくれて、投影中のキャッチボールがとても楽しかった。投影回によっては、少人数の団体への投影や複数の団体合同での投影があるので、雰囲気作りや導入部分を工夫するなど、自分なりに考え試してみた。
それぞれの投影は、対象や気を付けるべきポイントなどが違うが、段階を踏みながら練習ができたので、自分の中で区別し整理することができた。

4. 所感２（解説デビューから現在まで）

・長嶋

デビューしてから、大型映像も入れると週に平均８～９回ほどの投影を担当している。少しずつ慣れてきて、台本をなぞるだけの投影ではなく、お客様の雰囲気や反応に合わせて話せるようになった。ただ、番組内容が変わると今でも緊張することはある。
そして、得意・苦手の傾向が明確になってきた。私は少しテンポのある話し方や、イラストを描くことが得意である。そのため、テンポよく話したり、自作の星座絵を投影に取り入れたり、得意分野を活かした自分だけの投影ができるように意識している。一方、落ち着いた語り口が苦手で、静かに聴きたい方への配慮が今後の課題である。

図２：オリジナル星座絵

2024年2月には、「夜の科学館」で「恋」をテーマにギリシャ神話を大人向けに構成し、番組構成からプログラミング、演出までの全てを初めて自分一人で行った。お客様の反応も良く、大きな達成感とともに番組制作の奥深さを実感した。
試行錯誤の日々ではあるが、すべての経験が糧になっている。緊張も失敗もあるが、「投影が嫌だ」と思ったことは一度もない。これは自分の考えたフレーズを覚えて、リピートしてくださるお客様の存在や、投影後の「楽しかった」という声のおかげである。先輩から技術的な助言をいただける環境にもありがたく思う。これからもお客様や周りの仲間の期待に応えられるよう、自分らしい投影を目指していきたい。

・島田

同じような星空に見えているようで毎日星空が違うことに戸惑いを感じる。月は満ち欠けをし、惑星も恒星も少しずつ動く。投影前には当日のプラネタリウムの星空を確認し、直前の実際の空を観てから投影に臨む。どうアプローチしたらよいか、どのように伝えたらわかりやすいのか、試行錯誤の毎日である。また、観覧される方々も毎回違うので、空気感も全く違う。観ている方々と一緒に星空を楽しめるよう一瞬一瞬の天文現象をわかりやすく伝えていきたい。
自身の短所として以下が気がかりである。
・滑舌が悪い
・声が高くて聞きとりにくい
・話を思うようにまとめられない
・星を観るのが好きでも、専門的な宇宙物理や科学的な知識がないに等しい
　発声練習をしっかりと行うこと、知識向上に努めること、録音した音声を聴き自身の投影の見直しをすることを心掛けている。コンプレックスとは裏腹に、投影をし始めてから、当館の何人かの職員に、きれいな声で聴き心地がよい、やさしい口調でわかりやすい、と褒めてもらえた。本当に驚いたが、少しだけ自信を持てるようになった。また、先輩方からアドバイスをいただき、小さな一歩でも少しずつ自信を持てるようになってきている。
2024年11月の「夜の科学館（テーマ：ファッション）」では、ギリシャ神話の登場人物の服装を切り口に、古代から現代の服装史と産業技術の発展、宇宙服について内容を展開した。高校生以上の大人を対象としているため、踏み込んだ話や過去から未来への繋がり、環境問題への問題提起なども考慮した。先輩方の指導の下、番組の構成やプログラミングを自身で全て行い投影できたことは、感慨深く自信にも繋がっている。
2025年1月には、日本在住の外国にルーツを持つ方々も楽しめる「やさしい日本語」プラネタリウムの投影を担当させていただいた。本投影では、小学生高学年から中学生とそのご家族を対象としており、理科の授業で習う言葉遣いも取り扱った。視覚的にもわかりやすいよう絵や文字を工夫し、話すスピードに気を付けるなど、準備段階でたくさんの気づきをもらえる投影となった。当日は、日常会話で日本語が難しいと感じている方々も、星空をみて気持ちが安らぐようなきっかけになったら嬉しいという思いを込めて投影した。
現在の課題は、時間の配分である。話したいことが多すぎるのか、話す速度がゆっくり過ぎるのか、5分程オーバーしてしまうことが多々ある。どうしても時間を忘れて星空案内をしてしまうきらいがある。時間通りに終われるように時計を見ながら投影できるよう努力をしている。
また、明石市立天文科学館館長井上毅氏とお話させていただく機会があり、録音による練習をお勧めしていただいた。最近は、自身の投影練習や投影回を録音し、内容や言葉使い、話し方の速度やメリハリの付け方などを見直すようにしている。
投影を担当する度に反省点や改善点が増えていく。先輩方に相談してウィークポイントを教えてもらうことを日々繰り返し、それらを活かして試したり挑戦したりしながら、日々精進している。

5. 所感3（今後の展望）

・長嶋

今後は一般投影の番組制作に取り組んでいきたい。また、プラネタリウムでの投影にとどまらず、対面型のイベントの企画などにも挑戦していきたい。
スキル面では、専門的な知識を深めるとともに、投影の技術面も引き続き磨いていくつもりだ。
目指しているのは、ふとした日常の中でプラネタリウムでの話を思い出してもらえるような、心に残る解説ができる解説員である。星にあまり興味がなかった方にとっても、空を見上げたときに少しでも星のことを思い出してもらえるような、そんな時間を届けられるよう、これからも工夫と努力を重ねていきたい。

・島田

プラネタリウムを観に来た方が、「星がきれい」と思ったり、「知らなかった」ことや「難しい」ことに出会えたり、「本当の空で星を探してみたい」と思ったり…、何かしら「感動」を持ち帰ってもらえるプラネタリウムを投影できるようになるのが最大の目標だ。
私は、宇宙物理を専攻しているわけでも理系出身でもない。ただ星を観ることが好きで、プラネタリウムを観ることが大好きなだけだ。プラネタリウムを観ていても難しいと思うことは避けて通ってきたような人間である。きっと多くの観覧者が、私と同じように、難しいと思うことはなるべく避けて通りたい、というような感覚を持っているのではないかと考える。わからないことを理解したいと思うし、理解できた時は楽しくて仕方がない。この感覚もきっと多くの人が味わえる感動に繋がる。観覧者の方々と一緒に楽しめるようなプラネタリウムを私なりに投影できたらと感じる。弱みを強みに変えて進んでいきたい。

今後は、やってみたいこと、やるべきことがたくさんある。例えば、やさしい日本語プラネタリウムの日常的な実施と、聴覚障害や視覚障害のある方々も一緒に楽しめるプラネタリウムや星図の触図作成を実施していきたい。また、現在、私自身が所属しているボランティアの活動や観望会を通して、実際の星を観ること、たくさんの人と一緒に星空を楽しむ時間を共有できることを大切にしていきたい。投影の他にも、当館で興和プラネタリウムが展示されていることの素晴らしさを来館者に伝えていきたい。科学館のプラネタリウムで解説する意義も含め、今後の業務に取り組んでいきたい。
今でも投影は毎回緊張する。しかし、観覧者の方々の声や呼吸を感じると、とても楽しくなる。これからも観覧者の方々と一緒に楽しみながらプラネタリウムの星空案内をできたら嬉しい。そして、プラネタリウム解説員として働けることに、毎日感謝しながら投影をしたい。